

エース像教わった

ミュンヘン五輪金メダリストの横田忠義氏 ショックです。エースとは何ぞやということを教わった。守りでも要になれと、1日6時間のレシーブ練習を100日続けたこともある。僕らは松平さんが求めることをやれば世界一になれる信じていた。

超えられなかつた

田中幹保・元男子日本代表監督 監督になった時、「1年で勝てるようになるなんて思うなよ」と声を掛けられ、肩の荷が下りた気がした。松平さんを超えないとい日本界は変わらないと思ってやつたが、かなわなかつた。

復活見守って

植田辰哉・男子日本代表監督 全日本の監督として責任を果たし、五輪で男子バレーを再びよみがえらせることが最高の恩返し。天国から見守ってください。

遺志継ぎメダルを

真鍋政義・女子日本代表監督 昨年、ワールドカップの期間中に「ロンドン五輪でメダルを取るために頑張れ」という激励の電話をいただいた。遺志を引き継ぎたい。

バレーボール育成 コート外も



ミュンヘン五輪で優勝し、選手に胴上げされる松平康隆さん=1972年9月(共同)

男子日本代表のコーチとして臨んだ東京五輪は銅メダルだった。一方、「東洋の魔女」と呼ばれた女子は金メダル。「女子は立派な世界一、男子はやっと銅メダルという扱い」と当時の松平さんは憤慨する。だが、その後、松平さんが考案した「移動時間差攻撃」は外国勢の高いブロックを翻弄(ほんろう)し、監督として指揮を執った8年後のミュンヘン五輪の金メダルに結実する。当時のメンバーだった大古誠司・男子日本代表元監督は「監督の世界一への執念はすごかった」と振り返る。

一方、コート外ではマスメディアを積極的に活用した。ミュンヘン五輪前には男子バレーボールを題材にしたアニメと実写のテレビ

昨年12月31日に81歳で死去したことが5日分かかった日本バレーボール協会名誉顧問の松平康隆さんは、コートの内外で独自性を發揮し、日本バレーボール黄金期を築き上げた。

(27面参照)

メディア戦略巧み

番組「ミュンヘンへの道」に携わり、視聴者の期待を高めた。少年少女の雑誌への露出を増やしたり、協会自ら選手のグッズ製作、販売を手掛けたりもした。松平さんは「自分がやっているスポーツを少しでも多くの人に関心を持ってもらいたいと思うのは当たり前のことで」と話していた。

中でも力を入れたのはテレビ放映だ。毎年のように国際大会が日本で開催される競技はバレー以外にほとんどないが、松平さんが仕掛けたテレビ戦略による放映権料がその根底にある。監督時代から「監督は可能なプロモーターでなければならない」と公言した。

日本協会によると、松平さんは最期をみとった妻俊江さんに対し「バレーボール一筋に人生を終えられて非常に幸せ。やりたいことは全部できだし、思い残すことは何もない人生だった」と語ったという。

【芳賀竜也、百留康隆】

故松平さん「有能な宣伝者たれ」

松平さん死去

評伝

1972年

五輪でバレーボールの男子代表監督として日本に金メダルをもたらした松平康隆さんが、昨年12月31日に81歳で死去した。72年、政界では田中角栄氏が首相に就任した。田中氏は、豊かな知識、人脈、実力から「コンピューター付きブランドマーク」と評されたが、松平さんも同タイプ。緻密な戦略を立て、好機と見れば、すぐに走り出すリーダーだった。

(17面に関連記事)

親は「目の不自由な私がばかにされまい」と必死で生きているのに、不自由ない息子が負け犬に見えて情けない」。見えない目から涙を流す光景を終生忘れない」と話していた。入160ヶ台の小柄ながら慶大、実業団では9人制の花形選手。バレーボール(6人制)が初めて五輪競技に採用された東京五輪(64年)で、指導者として銅メダルを獲得した。しかし「東洋の魔女」の全日本女子が金メダルを獲得したため、市川嵐監督の記録映画は金貢だった母親に厳しく育てられた。小学3年生だったある日、級友たちにいじめられて逃げるようになってしまった。話を聞きつけた母

たないとだめなんだ」。8年後のミュンヘン五輪優勝に照準を合わせた強化が始まった。2年後、小学5年生だった一人息子を滑落死で失い、勝利への執着は一層強固になった。入念なデータ分析で、ミュンヘンの決勝相手は東ドイツと確信した。研究のために試合が必要だが、当時、東ドイツと国交はなく、チークを日本に招くのは難しかった。悩みながら渋谷を歩いていた時、いう口癖を地で行くバイタリティー。五輪以前に親善試合は実現し、成果は、ミュンヘンの決勝で出た。

その後、日本協会会員品を集めた展覧会のポスターが見えた。「この展覧会の関係者と一緒にバレーチームを来日させて親善試合をやろう」と思い立った。元主催するテレビ局の系運動部長 堂馬隆之

バレーボール男子に黄金時代

列新聞社の社長を訪ね、承諾させた。

次の難問は国家として未承認のため、国名表示も、国旗掲揚も国歌者唱も許されないこと。それでは相手は来日しない。すぐ当時の愛知揆一外相宅を訪れ、国名表記だけはOKを取った。「金メダルを取るために、犯罪以外は何でもやつた」という口癖を地で行くバイタリティー。五輪

前年に親善試合は実現し、成果は、ミュンヘンの決勝で出た。

その後、日本協会会員品を集めた展覧会のポスターが見えた。「この展覧会の関係者と一緒にバレーチームを来日させて親善試合をやろう」と思い立った。元主催するテレビ局の系運動部長 堂馬隆之